

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿<sup>十</sup>源氏解読

連載第 66 回 第 12.4 節

2020 年 9 月 15 日

小 田 勝

「12.4 格助詞「に」」の 376 頁から。「⑦原因」の「に」の類例、

- ・君恋ふる涙に月は見えねども面影のみぞたちも離れぬ（続拾遺 1300）

用例(8)～377 頁用例(16)の類例、

- ・中将も、いとあはれなるまみにながめ給へり。（源・葵）
- ・行きずりのうちつけ心にのたまはむこと聞かむこそ、をかしけれ。（今昔 28-1）

用例(17)の類例、

- ・北京東山の辺に、長樂寺といふ所に、唯蓮房といふ尼、これなり。（発心集 8-6）

用例(18)～(24)の類例をあげる。

- ・み山には雲より雪のかつ散りて霰に急ぐ（＝霰ガ降ッテ旅路ヲ急グ）野路の旅人（沙弥蓮愉集）
- ・「この人、おのれに（＝私ニ免ジテ）許されよ。これは必ず往生すべき相ある人なり。…」（宇治 4-6）
- ・[母上ノ] 御慈悲をもつて、祐成に（＝私十郎祐成ニ免ジテ）[五郎ノコトヲ] 御許し候へかし。（曾我物語）

用例(21)は、初刷・第 2 刷で「思ひ出む」となっていたのを、第 3 刷で「思ひ出でむ」に訂正した。

378 頁用例(28)～(37)の類例をあげる。

- ・艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに（源・蓬生）
- ・ゆゑある黄昏時の空に、花は、去年の古雪思ひ出でられて、枝もたわむばかり咲き乱れたり。（源・若菜下）
- ・「……」とてうち傾き給へる[玉鬘ノ]さま、灯影にいと美しげなり。（源・常夏）
- ・ほどなき月も雲隠れぬるを、星の光に遊ばせ給ふ。（堤・逢坂越えぬ権中納言）
- ・しののめのゆふつけ鳥の鳴く声にはじめてうすきせみの羽衣（拾遺愚草）
- ・旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし（新古今 953）
- ・藻塩焼く浦の煙を風に見て靡かぬ人の心をぞ思ふ（玉葉 1340）

次例も環境の「に」で、「月をながめて」ではない所が秀逸である。

- ・来ずも来ず頼まじ待たじ忘れむと思ひながらも月にながめて（歌合Ⅱ88 金玉合）

379 頁用例(41)～(44)の類例をあげる。

- ・[女二宮ガタ霧ノコトヲ] かの過ぎにし方に（＝亡クナッタ柏木ニ較ベテ）思し落とすをば（＝見下シナサルヲ）、[夕霧ハ] 恨めしげに恨み聞こえ給ふ。（源・夕霧）
- ・天皇これを御覧じて、限りなく貴んで、すなはち聞こし召すに、その味あぢはひ他ほかに異なり。（今昔 14-40）

なお、用例(44)は、対象の「に」ともとれるので、不適切であった。

「比較の基準」に関連して。次のような「に」は、「配分の基準（…につき、…の中で）」を表す。

- ・昔は遊学生とて十二年に一度もろこし唐土にさるべき人渡し遣はしてかの国の才を習はされけり。（とりかへばや）
- ・[碁ノ] 三番に数一つ勝ち給はむ方に花を寄せてむ。（源・竹河）

上の第2例の「三番に数一つ勝つ」は「三番中、二番勝つ」の意である（甲乙が三番対戦して、甲が乙より一番多く勝つの意）。宿木巻には「三番に数一つ負く」（二敗の意）という例もある。次のような「に」は、「割合の基準」を表す。

- ・かくて臥し給へるほどに、まうぼる（＝召シ上ガル）もの、日に橘一つ（うつほ・藤原の君）
- ・[大地震ノ余震ガ] やうやう間遠になりて、…二三日に一度など、おほかたその名残みつき三月ばかりや侍りけむ。（方丈記）

次のような「に」は、「序数の基準点」を示す。

- ・源三位入道と申すは、摂津守頼光に（＝から数えて）五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なり。（平家4・鶴）

次のような「に」は、「…にとって」「…の立場から」の意を表す。

- ・右馬助孝時、孝道には長男なり。（文机談）
- ・音に聞く人（＝アナタ）をあやなく（＝気ガカリニ）思ふ身（＝私）に [コノ文ヲ] 山路を越ゆる跡と知らなん（中務集）〈詞書「美濃国なる人のもとへ文やるとて、奥に」〉
- ・かの禅門は後二条関白殿の五代の後胤、尾張守孝定には孫、木工権頭孝道には嫡男なり。（文机談）

\*\*\*\*\*

源氏物語（湖月抄） 解説 桐壺（11）

（増註版 20 頁、  
新全集 29 頁）「宮城野の（宮中で）露を吹きつけては玉と結ぶ（野分の）風の

音を聞くにつけ、小萩（里にいる若宮）のことが思いやられる<sup>①</sup>」とあるが、  
（母上は）最後まで御覧になれない。「長生きが、たいそう辛いと思ひ知らせ  
せていただかないではいられないうえに、（長命の）高砂の松が思うだろう  
ことさえも、恥ずかしいと存じますので、宮中<sup>②</sup>にもしも出入りいたします  
ならそれは、いっそうとても憚りが多いことで……。畏れ多いお言葉を何度  
もいただきながら、私自身は思ひ立たせていただくことができそうにない。  
若宮はどのように理解していらっしゃるのか、参内なさろうことばかりお気  
が急<sup>せ</sup>いていらっしゃるように見えるので、もっともだと悲しくお見申し上げ  
ておりますなどと、内々に存じております<sup>③</sup>由を奏上なさってください。（私  
は）不吉な身でございますので、（若宮が）こうしていらっしゃるのも、忌  
まわしく、畏れ多いことで……。とおっしゃる。若宮はお休みになってしま  
ったのだった<sup>④</sup>。「（若宮を）拝見して、詳しくご様子も奏上したいのです  
が<sup>⑤</sup>、（帝は）今頃待っていらっしゃるだろうし、（以下次号）

（注）①参考「野分したる朝に、幼き人をだに問はざりける人に／あらく吹く風は  
いかにと宮城野の小萩が上を人の問へかし」（新古今 1819・赤染衛門） ②原文「も  
もしき」は、「大宮」に係る枕詞をそのまま「大宮」の意に用いたもの。『総覧』  
661 頁。 ③原文「思ひ給へる」。諸本のように「思ひ給ふる」でなければなら  
ない。 ④この 1 文、地の文とみる。 ⑤原文「奏し侍らまほしきを」。この少  
し後（ほんの 2 行くらい後）には「聞えまほしう侍るを」とある。